

皆様、こんにちは。

カトリック府中教会、アンドレアです。

今日の福音の中で、イエスは弟子たちに説明します。わたしは「必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている」。十字架には価値があるということは、そう簡単に納得できるものではありません。人間の普通の常識的な価値観とは、逆のものです。

私たちの求める奇跡とは、人間の苦しみを取り除いてくれる神の力です。私たちには楽園理想があります。嘆きも涙もない完全な幸せな状態をあこがれ求めています。神がきっとそうした状態を与えてくださるだろうと期待しています。それを叶えてくださる神の働きを、奇跡といいます。こうした価値観から見れば、苦しみはもっとも避けるべきもの、もっとも嫌悪すべきものです。

しかし、愛という世界から見れば、苦しみは価値をもってきます。人と人が手を取りあって生きていく時、そこにはかならず自己否定がついてまわります。自己否定がある時にはかならず苦しみもついてまわります。しかし苦しみの中で誠実であればあるほど、愛は深く確かなものになっていきます。愛の道には苦しみが伴うものです。愛を生きる者には地上の楽園はありえないのです。愛はそのうちに死につながるものをもっています。自分の好み、趣味、生きがい、自分の生きる権利まで否定していくのが愛です。愛の道は十字架の道です。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」。キリスト信者は、愛をもって自分の十字架を受け入れることによって、主に従います。キリスト信者は知っています。わたしはひとりで十字架を担うではありません。むしろ、イエスとともに十字架を担い、イエスご自身がご自分をささげた道にあずかるのです。

